

# オオムラサキ生息状況に異変

秦野市渋沢の八国見山（319㍎）南面区域で大規模な霊園開発が始まった2014年11月以降、国蝶オオムラサキの生息状況に異変が生じていることが分かった。もともとの生息域が失われた一方で、全く別の場所で幼虫が増えているのが見つかった。生息に適した場所にあったエノキが撤去されたことや、霊園への進入道路の建設などで周囲の樹木が皆伐状態となって環境が激変したことが影響しているとみられる。

【高橋和夫】

## 秦野・八国見山 霊園の開発以降

八国見山周辺はオオムラサキの幼虫が葉を食べるエノキが約200本あり、県内最大級の生息地として知られる。特に霊園区域と進入道路周辺は、最も生息に適した環境とされていた。NPO「日本チョウ類保全協会」や、県立生命の星・地球博物館の元学芸部長で、チョウ類研究では県内で最も詳しい高桑正敏さんらの呼びかけで、12年から渋沢丘陵で継続的に産卵調査が行われてきた。

昨年12月に調査したところ、これまで幼虫の個体数がゼロに近かった八国見山北西斜面のエノキ3本で、それぞれ20体前後の幼虫が確認された。調査を担当した中村康弘・同協

### エノキ撤去や樹木皆伐 全く別の場所で幼虫増

会事務局長は「オオムラサキがよりよい環境を探して産卵するようになったようだ」と分析。「生息に適した場所を産卵に利用できなくなったことで、幼虫の生存率が下がり、次第に衰退していくことも心配される。今後とも調査を継続して状況の変化を長期的に把握する必要がある」と指摘している。

今回の調査結果は13日午前10時半から国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区代々木）で開かれる「第12回チョウ類保全の集い」で、中村事務局長が概略を発表する。当日は、地球温暖化とチョウの分布などについて研究者らの報告もある。



葉の裏に隠れて越冬するオオムラサキの幼虫